派遣期間　２０１５年4月～２０１８年３月（３年間）

北京日本人学校で学んで

～　北京日本人学校　実践報告　～

苫小牧市立明倫中学校教諭　　中脇　尚子

◇派遣施設について

（１）名称

在中華人共和国日本国大使館付属北京日本人学校

（２）学校の立ち位置

①大使館付属の学校として

派遣期間中は、名称についている「大使館付属」という言葉の重みを理解するようにと折に触れて校長先生から話があった。もともとは大使館職員の子息のために設置された学校ということだが、それだけの意味ではない。校長先生は長期休みのたびに「私が誘拐されたら個人の話だけではない。みなさんも同じことなのです。何かトラブルを起こしてしまうと問題によっては国と国との話にもなる。」と話をしてくれた。公用パスポートを持っているというだけではなく、大使館の付属校である自覚をもたなければならないと強く感じていたことを思い出す。

②私立学校

北京日本人学校は生徒に入学金や授業料を払ってもらい、理事会を設置して学校運営をしている『私立学校』である。教育活動には大きな差はないと感じているが、「これがあったほうがいい」と教員の多くが感じているものについては理事会で決済がでるとすぐに購入することができた。また、教員数についても理事会で決められており、児童生徒数に対して教員の数が多いのは理事会で認証してもらったからである。（文部科学省派遣の教員数は決められているが、学校採用枠で人数を確保してくれている。）特別な支援や配慮を必要とする児童生徒が年々増加し、教員の人手が必要だと感じている現場の声をくんで、在籍児童生徒数は減っているのに教員数は維持してくれている。これらは現場の声を伝えてくれている管理職や事務職員と、私たちの声を受け止めてくれている理事会の皆さんのおかげである。

また私立学校なので、児童生徒数の維持・増加に努めなければならないということも勉強した。北京は赴任する邦人自体が減少傾向の都市である。北京の赴任を決めても単身赴任で来る人も多い。環境が日本と違うことに加えて日本人学校できちんと学力が付くのか、日本の仲間と距離ができてしまうのではないかという保護者の心配があるようだ。そこで管理職や事務職員は、一般企業に勤めている理事たちに「北京日本人学校の教育活動」を宣伝し、行事の時にはできるだけ足を運んでもらい、課題も成果もできるだけ共有するようにしてきた。私がいた３年間で保護者の声や教員の希望をできるだけ叶えてくれたが、その決断はすべて理事会で行われてきた。理事たちはどんどん「自分たちの学校」という意識をもっていってくれたのではないだろうか。このような経験は公立学校に勤めている間はなかなか経験できないことだったと思う。どんな学校をつくっていくのか、これは公立だろうと私立だろうと、全ての教職員がもっていてよいものではないだろうか。学校経営を間近で見られた

ことによって、「どんな学校をつくっていけばよいのか」という感覚が私にも芽生えたと感じている。

（３）学校教育目標

〇　思いやりのある子　　礼儀正しく，優しさと思いやりをもち，自他を大切にする子ども

〇　たくましい子　　生命を大切にし，進んで体力づくりに励む子ども

〇　求めて学ぶ子　　学ぶ楽しさや方法がわかり，進んで追求する子ども

〇　国際性豊かな子　　豊かな国際感覚を養い，自国理解に基づいた現地理解に努める子ども

（４）児童生徒数（２０１８年７月現在）

〇小学部・・・２７２名

〇中学部・・・　７６名　　合計　３４８名

（５）教育課程

中学部と小学部は同じ時程で学校生活を送っている。中学部は１コマの授業を４５分で行っているため、毎朝１５分間のモジュール学習（５教科）で補填することに加えて、文部科学省で定められた授業数よりも多く設定されている。

また、北京日本人学校は日本の学校と同程度の長期休業を確保し（保護者が日本企業の場合、日本の休みに合わせて休みが取りやすいため）、さらに中国人スタッフも働いていることから中国の祝日も休校日としている。反対に日本の祝日は休校とせずに登校日としてカウントしている。

また海外で暮らす外国人学校ということで、政治情勢によって登校や行事が左右される部分も少なからずある。危機管理の観点から、日本の感覚よりも敏感に登校を検討しなければならない。

私の赴任していた頃の北京はＰＭ２．５の数値が高い日も結構あり、その数値によって休校措置を取らざるをえないことも数回あった。（現在は北京の大気汚染は大幅に改善している）

上記の理由により、授業時数はかなり多く確保されている。「日本の学校と同程度の教育活動・教育水準」を確保するために、教育課程の整備は大きく影響している。

【北京日本人学校小学部の授業時数】

	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	道徳	特別活動	総合	外国語	授業時数
1年	320	—	152	—	114	69	76	—	114	38	43	—	60	986
2年	325	—	185	—	115	75	76	—	114	38	38	—	60	1026
3年	255	75	185	95	—	60	60	—	114	38	38	70	70	1060
4年	258	101	190	110	—	60	65	—	110	35	47	70	70	1116
5年	190	105	190	113	—	55	55	60	90	35	57	70	70	1095
6	19	11	19	11	—	50	50	55	90	35	58	70	70	108

年	0	2	0	2										2

【北京日本人学校中学部の授業時数】

	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭	外国語	道徳	特別活動	総合	中国英会話	総時数
1年	156	117	156	117	50	50	118	78	173	40	40	56	70	1221
2年	156	117	117	156	40	40	118	80	175	40	40	80	70	1229
3年	117	156	156	156	40	40	118	40	174	40	40	80	70	1227

（6）国際的な教育活動

①充実した外国語授業

英語の授業の他に、週に２時間の英会話の授業を行っている。講師は日本語を話さないネイティブの方を北京で探している。この中国という地で英語圏の方を探し、限られた予算の中で講師をしてもらうということはなかなか難しいことで、事務局と英会話担当教師が大きな労力を使ってこの体系を維持してくれている。

中国語の授業は週に１時間行っている。習熟度別に１学年を５クラスに分けている。（つまり中国語講師はつねに５名体制）転出入が激しく中国語を１つもわからない状態で転校してくる児童生徒が毎月のようにいる一方で、幼いころから中国に住み日常会話で中国語を使っている児童生徒もいるのが現状である。中国語講師も、クラス分けや授業の内容を工夫しながら運営にあたってくれている。

②交流・体験活動

小学１・２年生・・・国際ドッジボール大会（ドイツ人学校、フランス人学校とドッジボールで交流）

小学３・４年生・・・北京市内の現地小学校と交流

小学５・６年生・・・韓国人学校との交流

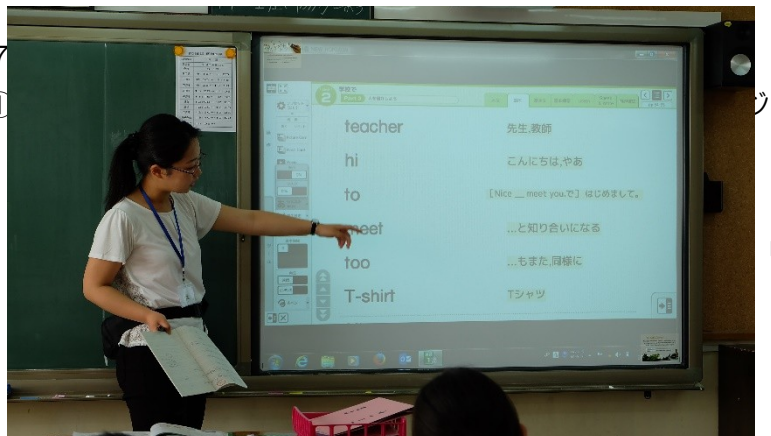
修学旅行や研修旅行で中国各地の小学生と交流

中学部　・・・北京市月壇中学校と共催で国際弁論大会を毎年実施

修学旅行で中国各地の中学生と交流（杭州、成都、瀋陽など）

（7

①　　ジェクターの導入

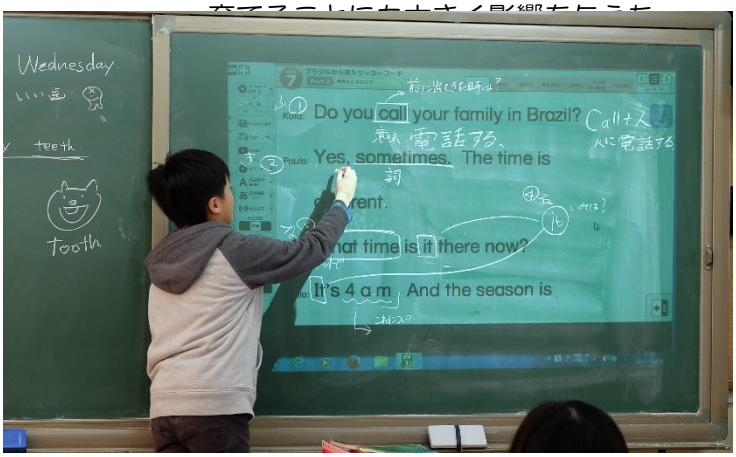


これによりデジタル教科書の活用が大幅に進んだ。

毎回プロジェクターを設置しなくても
パソコンとつなぐだけで位置もピント
も合っているのは本当に助かった。

子どもたちのプレゼンテーション力を

２０以上の教室にこれらの機器を導入することは北京のＳＯＮＹに勤務している理事長のご尽力が大きかった。
これらの機器のおかげで授業は何倍も活動的なものになったと評判であった。



②２０台のタブレットを導入
　このタブレットにより、調べ学習によるパソコン室のブッキングが解消されただけではなく、体育の時間に自分の動きを確認する、理科の時間に雲の動きを観察する、英会話の時間に辞書がわりに使う、
総合的な学習の時間にカメラがわりに使う、などの活用ができた。
　導入した翌年にはさらに追加購入して台数を増やした。

③影響
　施設・設備の充実により、安心して日本人学校に通わせられると保護者に感じてもらうことが大きな
目的の１つであった。年々児童生徒数が減っていることは、北京日本人学校の課題の１つであった。これから北京に赴任してくる保護者が学校の不安で単身赴任を決めることのないよう、管理職や学校理事の皆さんは常に考えてくれていた。児童生徒数は緩やかに減少していたが、月によっては前年度比微増の月もあった。
　また、これらＩＣＴ教育の充実は上海に住んでいる日本人の中でも話題にあがっていたようだ。長年中国国内を転勤してまわっている保護者もおり、北京から上海や天津に転校していった生徒の保護者が話題に出してくれたようだ。

（８）特色ある教育活動　～たてわり班活動～
　リーダーの育成と様々な生徒の活躍の場を作る目的で、小１から中３までを約２０班にわけた『たてわり班』を作っている。この『たてわり班』は週２回のたてわり班清掃と、年２回の大きな行事

（９）危機管理

①警備員の活躍

在外教育施設では警備員を配置している学校が多いと思うが、北京日本人学校でも学校設立当時から警備員を配置している。その当時の政治情勢や、民間感情からもいろいろな標的になることが考えられる在外教育施設。警備員は学校に泊まり込んで警備にあたってくれている。彼らは各校門に常駐し入校する人を管理するだけではなく、子どもたちの登下校時にも車の交通整理などにあたっている。

休日に日本人学校を会場にしてイベントを行う時も彼らは警備員として立ち続ける。勤務としては日本と同じ８時間労働の交代制をとっているが、勤務が始まると何カ月も学校に泊まり家族に会えるのは年に数回という警備員もいる。

彼らの労働環境を整えて安定した人材を確保し、気持ちよく働いてもらえるよう、管理職と事務局は心を砕いていた。その様子を近くで見ていた私は、心から「学校は教員が動かしているものではない」と感じた。危機管理についてはもちろんだが、学校が教員の動かすものではないということも北京で教えてもらったと感じている。

②避難訓練

北京日本人学校では教員だけが対象の避難訓練が年１回、そして児童生徒を対象にした避難訓練が年３回行われる。脱北者が侵入した経緯をもつ北京日本人学校ではこの避難訓練がかなり厳しく行われていた。「厳しい」というのは児童生徒に厳しく当たるのではなく、教員に「厳しさ」が求められた。

大使館から警備担当の方を招いて、学校の危機管理について教員みんなで考えたりもした。１週間日本人学校の警備体制を観察してもらった上でアドバイスをもらったのだが、脱北者を想定した２０年前から変わらない避難訓練はやはり現代には合わず、今はテロや不審者対応に重点を置くべきとのアドバイスをもらった。テロにより下校できなかった時の対応や、避難する教室も整理され、より現実的な避難訓練になっていったと感じている。

◇北京での生活について

北京で生活していて不便を感じたことはない。日本とは違う場所で生活することになるのだからきっと不便なこともあるとは思うが、それを気にする人は在外教育施設での勤務を希望しない方がいいと、個人的には思っている。どんな場所でもそこで日本人が、そして子どもたちが生活していることを考えると何とかなるでしょう！と考えられる人には、ぜひとも行ってもらいたいと思う。在外教育施設で力を発揮していた先生方にはこのような人が非常に多かったと思う。

　どんな場所に決まってもやるしかない！と腹をくくれる先生にはどんどん希望して行ってもらいたい。また少しでも在外教育施設に興味のある先生は、どうか些細なことを気にせず挑戦してもらいたい。

　いいことが１つも想像できないような土地でも、行って新しい自分に出会えることもあるのだから。

　そこには、温かく優しい、まだ見ぬ友人がいるのだから。

　そして、みなさんを待っている子どもたち、保護者の方々がいるのだから。